歌唱集

１頁～２２頁

ふるさと益田の応援団

近畿益田会　ハイキング部

北国の春

白樺　青空　南風
こぶし咲くあの丘北国の　ああ北国の春
季節が都会では　わからないだろと
届いたおふくろの　小さな包み
あの故郷へ　帰ろかな　帰ろかな

雪どけ　せせらぎ　丸木橋
からまつの芽がふく北国の　ああ北国の春
好きだとおたがいに　いいだせないまま
別れてもう五年　あの娘はどうしてる
あの故郷へ　帰ろかな　帰ろかな

やまぶき　朝霧　水車小屋
わらべ唄きこえる北国の　ああ北国の春
あにきもおやじ似で　無口なふたりが
たまには酒でも　飲んでるだろか
あの故郷へ　帰ろかな　帰ろかな

四季の歌

春を愛する人は　心清き人
すみれの花のような　ぼくの友だち

夏を愛する人は　心強き人
岩をくだく波のような　ぼくの父親

秋を愛する人は　心深き人
愛を語るハイネのような　ぼくの恋人

冬を愛する人は　心広き人
根雪をとかす大地のような　ぼくの母親

上を向いて歩こう

上を向いて歩こう　涙がこぼれないように
思いだす　春の日　ひとりぼっちの夜

上を向いて歩こう　にじんだ星を数えて
思いだす　夏の日　ひとりぼっちの夜
仕合せは　雲の上に　仕合せは　空の上に
上を向いて歩こう　涙がこぼれないように
泣きながら　歩く　ひとりぼっちの夜

口笛（上を向いて歩こう）
口笛（涙がこぼれないように）
思いだす　秋の日　ひとりぼっちの夜
悲しみは星の影に　悲しみは月の影に
上を向いて歩こう　涙がこぼれないように
泣きながら　歩く　ひとりぼっちの夜
ひとりぼっちの夜（ゆっくり）

みかんの花咲く丘

みかんの花が　咲いている
思い出の道　丘の道
はるかに見える　青い海
お船がとおく　かすんでる

黒い煙を　はきながら
お船はどこへ　行くのでしょう
波に揺られて　島のかげ
汽笛がボウと　鳴りました

いつか来た丘　母さんと
いっしょにながめた　あの島よ
今もひとりで　見ていると
やさしい母さん　思われる

白い花の咲く頃

白い花が　咲いてた　　ふるさとの　遠い夢の日
さよならと　言ったら
黙って　うつむいてた　　お下髪（さげがみ）
悲しかった　あの時の　　あの　白い花だよ

白い雲が　浮いてた　　ふるさとの　高いあの峰
さよならと　言ったら
こだまが　さよならと　　呼んでいた
淋（さみ）しかった　あの時の　　あの　白い雲だよ

白い月が　泣いてた　　ふるさとの　丘の木立（こだち）
さよならと　言ったら
涙の眸（ひとみ）で　じっと　　みつめてた
悲しかった　あの時の　　あの　白い月だよ

青い山脈

若く明るい　歌声に
雪崩は消える　花も咲く
青い山脈　雪割桜
空のはて　今日もわれらの　夢を呼ぶ

古い上衣よ　さようなら
さみしい夢よ　さようなら
青い山脈　バラ色雲へ
あこがれの　旅の乙女に　鳥も啼く

雨にぬれてる　焼けあとの
名も無い花も　ふり仰ぐ
青い山脈　かがやく嶺の
なつかしさ　見れば涙が　またにじむ

父も夢見た　母も見た
旅路のはての　そのはての
青い山脈　みどりの谷へ
旅をゆく　若いわれらに　鐘が鳴る

愛燦燦

雨　潸々(さんさん)と　この身に落ちて
わずかばかりの運の悪さを　恨んだりして
人は哀しい　哀しいものですね
それでも過去たちは　優しく睫毛に憩う
人生って　不思議なものですね

風　散々(さんざん)と　この身に荒れて
思い通りにならない夢を　失くしたりして
人はか弱い　か弱いものですね
それでも未来たちは　人待ち顔をして微笑む
人生って　嬉しいものですね

愛　燦々と　この身に降って
心密かな嬉し涙を　流したりして
人はかわいい　かわいいものですね
ああ　過去たちは　優しく睫毛に憩う
人生って　不思議なものですね

ああ　未来たちは　人待ち顔をして微笑む
人生って　嬉しいものですね

悲しき口笛

丘のホテルの　赤い灯も
胸のあかりも　消えるころ
みなと小雨が　降るように
ふしも悲しい　口笛が
恋の街角　露路の細道　ながれ行く

いつかまた逢う　指切りで
笑いながらに　別れたが
白い小指の　いとしさが
忘れられない　さびしさを
歌に歌って　祈るこころの　いじらしさ

夜のグラスの　酒よりも
もゆる紅色　色さえた
恋の花ゆえ　口づけて
君に捧げた　薔薇の花
ドラの響きに　ゆれて悲しや　夢と散る

瀬戸の花嫁

瀬戸は日暮れて　夕波小波
あなたの島へ　お嫁に行くの
若いと誰もが　心配するけれど
愛があるから　だいじょうぶなの
だんだん畑と　さよならするのよ
幼い弟　行くなと泣いた
男だったら　泣いたりせずに
父さん母さん　だいじにしてね

岬まわるの　小さな船が
生まれた島が　遠くになるわ
入江の向うで　見送る人たちに
別れ告げたら　涙が出たわ
島から島へと　渡ってゆくのよ
あなたとこれから　生きてく私
瀬戸は夕焼け　明日も晴れる
二人の門出　祝っているわ

異国の丘

今日も暮れゆく　異国の丘に
友よ辛かろ　切なかろ
我慢だ待ってろ　嵐が過ぎりゃ
帰る日もある　春がくる

今日も更けゆく　異国の丘に
夢も寒かろ　冷たかろ
泣いて笑って　歌ってたえりゃ
望む日がくる　朝がくる

今日も昨日も　異国の丘に
おもい雪空　陽がうすい
倒れちゃならない　祖国の土に
辿りつくまで　その日まで

旅愁

更け行く秋の夜　旅の空の
わびしき思いに　ひとりなやむ
恋しやふるさと　なつかし父母
夢路にたどるは　故郷（さと）の家路
更け行く秋の夜　旅の空の
わびしき思いに　ひとりなやむ

窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遥（はる）けきかなたに　心まよう
恋しやふるさと　なつかし父母
思いに浮かぶは　杜のこずえ
窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遥けきかなたに　心まよう

南国土佐を後にして

南国土佐を　あとにして
都へ来てから　幾年（いくとせ）ぞ
思い出します　故郷の友が
門出に歌った　よさこい節を
土佐の高知の　播磨屋橋（はりまやばし）で
坊さん簪（かんざし）　買うを見た

月の浜辺で　焚火（たきび）を囲み
しばしの娯楽の　一時（ひととき）を
わたしも自慢の　声張り上げて
歌うよ土佐の　よさこい節を
みませ見せましょ　浦戸をあけて
月の名所は　桂浜

国の父さん　室戸の沖で
鯨釣ったと　いう便り
わたしも負けずに　励んだ後で
歌うよ土佐の　よさこい節を
いうたちいかんちや　おらんくの池にゃ
潮吹く魚が　泳ぎよる
よさこい　よさこい

誰か故郷を想わざる

花摘む野辺に　日は落ちて
みんなで肩を　組みながら
唄をうたった　帰りみち
幼馴染（おさなじみ）の　あの友この友
ああ誰（たれ）か故郷を　想わざる

ひとりの姉が　嫁ぐ夜に
小川の岸で　さみしさに
泣いた涙の　なつかしさ
幼馴染の　あの山この川
ああ誰か故郷を　想わざる

都に雨の　降る夜は
涙に胸も　しめりがち
遠く呼ぶのは　誰の声
幼馴染の　あの夢この夢
ああ誰か故郷を　想わざる

見上げてごらん夜の星を

（＊見上げてごらん　夜の星を
小さな星の　小さな光が
ささやかな幸せを　歌ってる＊）
見上げてごらん　夜の星を
僕等のように　名もない星が
ささやかな幸せを　祈ってる
手をつなごう僕と
追いかけよう夢を
二人なら
苦しくなんかないさ
（＊繰り返し＊）

故郷

兎追いし　かの山
小鮒（こぶな）釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて、
忘れがたき　故郷（ふるさと）

如何（いか）に在（い）ます　父母
恙（つっが）なしや　友がき
雨に風に　つけても
思い出（い）ずる　故郷

志を　はたして
いつの日にか　帰らん
山は青き　故郷
水は清き　故郷

リンゴの唄

赤いリンゴに　口びるよせて
だまってみている　青い空
リンゴはなんにも　いわないけれど
リンゴの気持は　よくわかる
リンゴ可愛（かわ）いや可愛いやリンゴ

あの娘（こ）よい子だ　気立てのよい娘
リンゴによく似た　かわいい娘
どなたが言ったか　うれしいうわさ
かるいクシャミも　とんで出る
リンゴ可愛いや可愛いやリンゴ

朝のあいさつ　夕べの別れ
いとしいリンゴに　ささやけば
言葉は出さずに　小くびをまげて
あすもまたネと　夢見顔
リンゴ可愛いや可愛いやリンゴ

歌いましょうか　リンゴの歌を
二人で歌えば　なおたのし
みんなで歌えば　なおなおうれし
リンゴの気持を　伝えよか
リンゴ可愛いや可愛いやリンゴ

花は咲く

（東日本大震災復興応援チャリティソング）

真っ白な　雪道に　春風香る
わたしは　なつかしい　あの街を　思い出す
叶えたい　夢もあった　変わりたい　自分もいた
今はただ　なつかしい　あの人を　思い出す
誰かの歌が聞こえる　誰かを励ましてる
誰かの笑顔が見える　悲しみの向こう側に
（*花は　花は　花は咲く　いつか生まれる君に
花は　花は　花は咲く　わたしは何を残しただろう*）

夜空の　向こうの　朝の気配に
わたしは　なつかしい　あの日々を　思い出す
傷ついて　傷つけて　報われず　泣いたりして
今はただ　愛おしい　あの人を　思い出す
誰かの想いが見える　誰かと結ばれてる
誰かの未来が見える　悲しみの向こう側に
（*繰り返し*）
（*繰り返し*）
花は　花は　花は咲く　いつか生まれる君に
花は　花は　花は咲く　いつか恋する君のために

岸壁の母

母は来ました　今日も来た
この岸壁に　今日も来た
とどかぬ願いと　知りながら
もしやもしやに　もしやもしやに
ひかされて

呼んで下さい　おがみます
あゝおっ母さん　よく来たと
海山千里と　云うけれど
何で遠かろ　何で遠かろ　母と子に

悲願十年　この祈り
神様だけが　知っている
流れる雲より　風よりも
つらいさだめの　つらいさだめの
杖ひとつ

同期の桜

貴様と俺とは　同期の桜
同じ兵学校の　庭に咲く
咲いた花なら　散るのは覚悟
みごと散りましょ　国のため

貴様と俺とは　同期の桜
同じ兵学校の　庭に咲く
血肉分けたる　仲ではないが
なぜか気が合うて　別れられぬ

貴様と俺とは　同期の桜
同じ航空隊の　庭に咲く
仰いだ夕焼け　南の空に
未だ還らぬ　一番機

貴様と俺とは　同期の桜
同じ航空隊の　庭に咲く
あれほど誓った　その日も待たず
なぜに死んだか　散ったのか

貴様と俺とは　同期の桜
離れ離れに　散ろうとも
花の都の　靖国神社
春の梢に　咲いて会おう

ラバウル小唄

さらば　ラバウルよ　また来るまでは
しばし別れの　涙がにじむ
恋し懐し　あの島見れば
椰子の葉かげに　十字星

船は　出てゆく　港の沖へ
いとしあの娘の　打ちふるハンカチ
声をしのんで　こころで泣いて
両手合わせて　ありがとう

波のしぶきで　眠れぬ夜は
語りあかそよ　デッキの上で
星がまたたく　あの星　みれば
くわえ煙草も　ほろにがい

赤い夕陽が　波間に沈む
果ては何処ぞ　水平線よ
今日もはるばる　南洋航路
男船乗り　かもめ鳥

さすが男と　あの娘は　言うた
燃ゆる思いを　マストにかかげ
ゆれる心は　憧れはるか
今日は赤道　椰子の下

いい日旅立ち

雪解け間近の　北の空に向い
過ぎ去りし日々の夢を　叫ぶとき
帰らぬ人たち　熱い胸をよぎる
せめて今日から一人きり　旅に出る
ああ　日本のどこかに
私を待ってる　人がいる
いい日旅立ち　夕焼を探しに
母の背中で聞いた　歌を道連れに

岬のはずれに　少年は魚釣り
青いススキの小道を　帰るのか
私は今から　思い出を作るため
砂に枯木で書くつもり　さよならと
ああ　日本のどこかに
私を待ってる　人がいる
いい日旅立ち　ひつじ雲を探しに
父が教えてくれた　歌を道連れに

ああ　日本のどこかに
私を待ってる　人がいる
いい日旅立ち　幸せを探しに
子供の頃に歌った　歌を道連れに

今日の日はさようなら

いつまでも絶えることなく
友だちでいよう
明日の日を夢見て
希望の道を

空を飛ぶ鳥のように
自由に生きる
今日の日はさようなら
またあう日まで

信じあうよろこびを
大切にしよう
今日の日はさようなら
またあう日まで
またあう日まで

かあさんの歌

かあさんは　夜なべをして
手ぶくろ　編んでくれた
こがらし吹いちゃ　つめたかろうて
せっせと編んだだよ
故郷(ふるさと)のたよりはとどく
いろりのにおいがした

かあさんは　麻糸つむぐ
一日　つむぐ
おとうは土間で　藁(わら)打ち仕事
おまえもがんばれよ
故郷の冬はさみしい
せめて　ラジオ聞かせたい

かあさんの　あかぎれ痛い
生味噌(なまみそ)をすりこむ
根雪もとけりゃ　もうすぐ春だで
畑が待ってるよ
小川のせせらぎが聞える
なつかしさがしみとおる

秋桜（コスモス）

淡紅(うすべに)の秋桜が秋の日の
何気ない　陽溜(ひだま)りに揺れている
この頃　涙脆くなった母が
庭先でひとつ咳をする
縁側でアルバムを開いては
私の幼い日の思い出を
何度も同じ話　くりかえす
独り言みたいに　小さな声で
こんな小春日和の　穏やかな日は
あなたの優しさが　浸みて来る
明日嫁ぐ私に　苦労はしても
笑い話に時が変えるよ　心配いらないと笑った

あれこれと思い出をたどったら
いつの日も　ひとりではなかったと
今更ながら我儘な私に　唇かんでいます
明日への荷造りに手を借りて
しばらくは楽し気にいたけれど
突然涙こぼし　元気でと
何度も何度もくりかえす母
ありがとうの言葉を　かみしめながら
生きてみます私なりに
こんな小春日和の　穏やかな日は
もう少しあなたの　子供でいさせてください

早春賦

春は名のみの風の寒さや。
谷の鶯　歌は思えど
時にあらずと　声も立てず。
時にあらずと　声も立てず。

氷解(と)け去り葦は角(つの)ぐむ。
さては時ぞと　思うあやにく
今日もきのうも　雪の空。
今日もきのうも　雪の空。

春と聞かねば知らでありしを。
聞けば急かるる　胸の思いを
いかにせよとの　この頃か。
いかにせよとの　この頃か。

浜辺の歌

あした浜辺を　さまよえば
昔のことぞ　忍(しの)ばるる
風の音よ　雲のさまよ
寄する波も　貝の色も

ゆうべ浜辺を　もとおれば
昔の人ぞ　忍ばるる
寄する波よ　返す波よ
月の色も　星の影も

はやちたちまち　波を吹き
赤裳(あかも)のすそぞ　ぬれもせじ
やみし我は　すでにいえて
浜辺の真砂　まなごいまは

湖畔の宿

山の淋しい　湖に
一人来たのも　悲しい心
胸の痛みに　耐えかねて
昨日の夢と　焚き捨てる
古い手紙の　うすけむり

水にたそがれ　迫る頃
岸の林を　静かに行けば
雲は流れて　むらさきの
薄きすみれに　ほろほろと
いつか涙の　陽が落ちる

ランプ引き寄せ　故郷（ふるさと）へ
書いてまた消す　湖畔の便り
旅の心の　つれづれに
ひとり占う　トランプの
青い女王（クイーン）の　淋しさよ

なごり雪

汽車を待つ君の横で　僕は時計を気にしてる
季節はずれの　雪が降ってる
東京で見る雪は　これが最後ねと
さみしそうに　君がつぶやく

なごり雪も　降るときを知り
ふざけすぎた　季節のあとで
今　春が来て　君はきれいになった
去年よりずっと　きれいになった

動き始めた汽車の窓に　顔をつけて
君は何か　言おうとしている
君のくちびるが　さようならと動くことが
こわくて　下をむいてた

時がゆけば　幼い君も
大人になると　気づかないまま
今　春が来て　君はきれいになった
去年よりずっと　きれいになった

君が去った　ホームにのこり
落ちてはとける　雪を見ていた
今　春が来て　君はきれいになった
去年よりずっと　きれいになった

夏は来ぬ

一）卯の花の　匂う垣根に
　時鳥　早も来鳴きて
　忍音もらす　夏は来ぬ

二）五月雨の　そそぐ山田に
　早乙女が　裳裾ぬらして
　玉苗ううる　夏は来ぬ

三）橘の　かおるきばの
　窓近く　蛍飛び交い
　おこたり諫むる　夏は来ぬ

四）棟ちる　川辺の宿の
　門遠く　水鶏声して
　夕月すずしき　夏は来ぬ

五）五月やみ　蛍飛び交い
　水鶏なき　卯の花咲きて
　早苗うえわたす　夏は来ぬ

蛙の笛

一、月夜の田甫で　コロロ　コロロ
　コロロ　コロコロ　鳴る笛は
　あれはね　あれはね
　あれは蛙の　銀の笛
　さ、　銀の笛

二、あの笛きいてりや　コロロ　コロロ
　コロロ　コロコロ　眠くなる
　あれはね　あれはね
　あれは蛙の　子守唄
　さ、　子守唄

三、蛙が笛吹きや　コロロ　コロロ
　コロロ　コロコロ　夜が更ける
　ごらんよ　ごらんよ
　ごらんお月さまも　夢見てる
　さ、　夢見てる

冬景色

作詞・作曲者不詳

♩=120

1 3 5 | 5・4 3 | 2・3 2 7 | 5 — 0 |
さぎり きゆる みなとえの

5 7 2 | 3・2 1 | 3・2 1 7 | 1 — 0 |
ふねに しろし あさのしも

2 — 5 | 1 2 3 4 5 | 6・5 4 3 | 2 — 0 |
ただ みずとりの こえはして

3 2 1 | 5・6 5 | 3・2 1 7 | 1 — 0 ||
いまだ さめず きしのいえ

1 さ霧消ゆる 湊江の
舟に白し 朝の霜
ただ水鳥の 声はして
いまだ覚めず 岸の家

2 烏啼きて 木に高く
人は畑に 麦を踏む
げに小春日の のどけしや
かえり咲きの 花も見ゆ

3 嵐吹きて 雲は落ち
時雨降りて 日は暮れぬ
もし燈火の 漏れ来ずば
それと分かじ 野辺の里

大正二年五月『尋常小学唱歌(五)』

初冬の田園の朝・昼・夜の風景を簡潔にうたっています。一番は湖畔、二番は山畑、三番は村落と詩趣の深い名歌です。

夏の思い出

一、夏が来れば思い出す
　はるかな尾瀬　遠い空
霧の中に　浮かび来る
　やさしい影　野の小径
　　水芭蕉の花が　咲いている
　夢見て咲いている　水のほとり
　　石楠花色に　たそがれる
　　はるかな尾瀬　遠い空

二、夏が来れば思い出す
　はるかな尾瀬　野の旅よ
花の中に　そよそよと
　ゆれゆれゆれる　浮き島よ
　　水芭蕉の花が　匂ってる
　夢見て匂ってる　水のほとり
まなこつぶれば　なつかしい
　はるかな尾瀬　遠い空

いつでも夢を

一）星より　ひそかに　雨より　やさしく
　あの娘は　いつも　歌ってる
声が　聞こえる　さびしい胸に
　涙に　濡れた　この胸に
言っているいる　お持ちなさいな
　いつでも夢を　いつでも夢を
星より　ひそかに　雨より　やさしく
　あの娘は　いつも　歌ってる

二）歩いて　歩いて　悲しい　夜更けも
　あの娘の　声は　流れくる
すすり　泣いてる　この顔あげて
聞いてる　歌の　なつかしさ
　言っているいる　お持ちなさいな
いつでも夢を　いつでも夢を
歩いて　歩いて　悲しい　夜更けも
　あの娘の　声は　流れくる

　言っているいる
　　お持ちなさいな
　いつでも夢を　いつでも夢を
はかない　涙を　うれしい涙に
　あの娘は　帰る　歌声で
　あの娘は　帰る　歌声で

雪のふるまちを

2 雪の降るまちを　雪の降るまちを
足おとだけが　追いかけてゆく
雪の降るまちを
一人こころに　満ちてくる
この哀しみを　この哀しみを
いつの日かほぐさん
緑なす春の日の　そよ風

3 雪の降るまちを　雪の降るまちを
息吹きとともに　こみあげてくる
雪の降るまちを
誰も分らぬ　わが心
このむなしさを　このむなしさを
いつの日か　祈らん
新しきひかり降る　鐘の音

昭和二十八年二月「NHKラジオ歌謡」で発表された歌ですが、これより前、昭和二十四年十月から同二十七年四月までNHKのラジオ放送劇「えり子と共に」の挿入歌でした。その後、高英男の歌唱で放送され、昭和二十八年六月、キングよりレコードが発売。

花のまわりで

1 花のまわりで　鳥がまわる
鳥のまわりで　風がまわる
まわれ　まわれ　まわれ
こまのように　歌いながら
地球のように　まわろうよ

2 風のまわりで　雲がまわる
雲のまわりで　楽しいロンド
まわれ　まわれ　まわれ
虹のように　まるくなって
光となって　まわろうよ

3 まわるまわるよ　海をこえて
みんな楽しい　世界の子供
まわれ　まわれ　まわれ
赤い花　青い花輪
歌いながら　まわろうよ

昭和三十年八月　NHK全国唱歌ラジオコンクール課題曲　小学校の部

〈故郷の空〉

大和田建樹 作詞
スコットランド 民謡

一、夕空はれて　あきかぜふき
つきかげ落ちて　鈴虫なく
おもえば遠し　故郷のそら
ああわが父母　いかにおわす

二、すみゆく水に　秋萩たれ
玉なす露は　すすきにみつ
おもえば似たり　故郷の野辺
ああわが兄弟　たれと遊ぶ

明治二十一年

麦畑

（原曲の訳詞）

ふたりが　会うのは　麦畑
仕事の休みに　話します
空には　ましろな　雲がゆく
二人は楽しい　恋人です

〈紅葉〉

高野辰之 作詞
岡野貞一 作曲

一、秋の夕日に　照る山紅葉
濃いも薄いも　数ある中に
松をいろどる　楓や蔦は
山のふもとの　裾模様

二、渓の流れに　散り浮く紅葉
波にゆられて　離れて寄って
赤や黄色の　色さまざまに
水の上にも　織る錦

明治四十四年

ちいさい秋みつけた

サトウハチロー作詞
中田喜直 作曲

一、楽だれかさんが だれかさんが
だれかさんが 見つけた
小さい秋 小さい秋
小さい秋 見つけた

目かくし鬼さん 手のなる方へ
すましたお耳に かすかにしみた
呼んでる口笛 もずの声
楽小さい秋 小さい秋
小さい秋 見つけた

二、楽（繰り返し）
お部屋は北向き くもりのガラス
うつろな目の色 とかしたミルク
わずかな すきから 秋の風
楽（繰り返し）

里の秋

一 静かな 静かな 秋の空
お背戸に 木の実の 落ちる夜は
ああ 母さんと ただ二人
栗の実 煮てます いろりばた

二、 明るい 明るい 星の空
鳴き鳴き 夜鳴の 渡る夜は
ああ 父さんの あの笑顔
栗の実 食べては 思い出す

三、 さよなら さよなら 椰子の島
お舟に ゆられて 帰られる
ああ 父さんよ ご無事でと
今夜も 母さんと 祈ります